

平成26年度

第1回 富山高等専門学校 運営諮問会議

会 議 録

平成26年7月23日（水）

平成26年度 第1回 富山高等専門学校 運営諮問会議

日 時：平成26年7月23日（水）午後2時

会 場：富山高等専門学校本郷キャンパス大会議室

【会議次第】

1. 開会挨拶

2. 出席者紹介

3. 議 事

[1] 富山高等専門学校 平成25年度 年度計画実施状況について

[2] 富山高等専門学校 平成26年度 年度計画について

I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するために取るべき措置

1. 教育に関する事項

(1) 入学者の確保 P 81*

(2) 教育課程の編成等 P 81

(3) 優れた教員の確保 P 82

(4) 教育の質の向上及び改善のためのシステム P 83

(5) 学生支援・生活支援等 P 84

(6) 教育環境の整備・活用 P 84

2. 研究や社会連携に関する事項 P 85

3. 国際交流等に関する事項 P 86

4. 管理運営に関する事項 P 86

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するために取るべき措置 P 87

III 予算（人件費の見積もりを含む，収支計画及び資金計画） P 87

* ページは資料3のページ番号を表示

[3] その他

4. 閉会挨拶

【出席委員】

〔敬称略、順序不同〕

- 遠 藤 俊 郎（富山大学長）
松 本 三千人（富山県立大学工学部部長）
藤 堂 利 一（富山高等専門学校技術振興会会長）
及 川 武 司（一般社団法人全日本船舶職員協会専務理事）
犬 島 伸一郎（株式会社北陸銀行特別参与）
正 橋 哲 治（立山科学工業株式会社総務部人事グループグループマネージャー）
石 山 彰 雄（富山高等専門学校本郷キャンパス同窓会会長）
<代 理>
佐 野 友 昭（富山県教育委員会県立学校課 高校教育係 主幹 係長）
（坪 池 宏 富山県教育委員会県立学校課課長の代理）
富 樫 良 一（富山県中学校長会副会長）
（吉 江 友 秋 富山県中学校長会会長の代理）

【欠席委員】

- 黒 田 輝 夫（富山県中小企業団体中央会会長）
金 岡 純 二（公益財団法人富山第一銀行奨学財団理事長）
梅 田 ひろ美（株式会社ユニゾーン代表取締役会長）

【富山高等専門学校出席者】

- 石 原 外 美（校長）
西 田 均（副校長）
成 瀬 喜 則（副校長）
西 敏 行（教務主事）（本郷）
新 開 純 子（教務主事）（射水）
青 山 晶 子（学生主事）（本郷）
水 谷 淳之介（学生主事）（射水）
高 熊 哲 也（寮務主事）（本郷）
水 本 巖（寮務主事）（射水）
遠 藤 真（専攻科長）

林 興 一 (事務部長)
小 林 正 幸 (総務課長)
竹 山 富士男 (管理課長)
松 梨 英 輔 (学務課長)
山 田 豊 (学生課長)
船 崎 浩 之 (総務課課長補佐)
柴 田 淳 (総務課課長補佐)
穴 田 さおり (総務課課長補佐)
清 水 由美子 (総務課主査)
錦 織 掌 (総務課主査)

〔開会 午後 2時00分〕

1. 開会挨拶

【林事務部長】 本日はお忙しい中、委員の皆様方にはお集まりいただきありがとうございます。

ただいまから平成26年度第1回富山高等専門学校運営諮問会議を開催させていただきます。

議事に入るまでの間、進行を務めさせていただきます富山高専事務部長の林です。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、開会に当たりまして、本校の石原校長からご挨拶を申し上げます。

【石原校長】 本日はご多用の中、運営諮問会議にご出席いただきましてどうもありがとうございます。

先ほどもお客様とお話をしていたのですが、なかなか日本の財政がうまくいかないという状況があって、これからの学生諸君の教育をどうしていくべきかというその解を、実は今、得ようとしている状況です。

少子化という状況で、いかにして私ども教育機関が世の中の役に立てるかということであらうと思っております。できる限りいい人材を養成していく、これが私どもの第一義的な使命だろうと思っているところでございまして、今日は先生方からいろんな方面のご意見をぜひお聞かせ願いたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

2. 出席者紹介

【林事務部長】 それでは、本日ご出席いただいております委員の皆様方をご紹介します。

富山大学長 遠藤俊郎様。

【遠藤委員】 遠藤です。よろしくお願いいたします。

【林事務部長】 富山県立大学工学部長 松本三千人様。

【松本委員】 松本です。よろしくお願いいたします。

【林事務部長】 富山県教育委員会県立学校課長 坪池 宏様の代理で、県立学校課 高校

教育係 主幹 係長 佐野友昭様。

【佐野委員】 佐野です。よろしくお願ひいたします。

【林事務部長】 富山県中学校長会会長 吉江友秋様の代理で、富山県中学校長会副会長 富樫良一様。

【富樫委員】 富樫です。どうぞよろしくお願ひいたします。

【林事務部長】 富山高等専門学校技術振興会会長 藤堂利一様。

【藤堂委員】 藤堂です。よろしくお願ひいたします。

【林事務部長】 一般社団法人全日本船舶職員協会専務理事 及川武司様。

【及川委員】 及川です。よろしくお願ひします。

【林事務部長】 株式会社北陸銀行特別参与 犬島伸一郎様。

【犬島委員】 犬島です。よろしくお願ひいたします。

【林事務部長】 立山科学工業株式会社総務部人事グループグループマネージャー 正橋哲治様。

【正橋委員】 正橋です。よろしくお願ひします。

【林事務部長】 富山高等専門学校本郷キャンパス同窓会会長 石山彰雄様。

【石山委員】 石山です。よろしくお願ひします。

【林事務部長】 なお、本日、富山県中小企業団体中央会会長 黒田輝夫様、公益財団法人富山第一銀行奨学財団理事長 金岡純二様、株式会社ユニゾーン代表取締役会長 梅田ひろ美様におかれましては、ご都合によりご欠席です。

続きまして、この場に同席させていただきます本校の関係者を紹介させていただきます。
校長の石原です。

副校長の西田教授です。

同じく副校長の成瀬教授です。

教務主事（本郷キャンパス）の西教授です。

同じく教務主事（射水キャンパス）の新開教授です。

学生主事（本郷キャンパス）の青山教授です。

同じく学生主事（射水キャンパス）の水谷教授です。

寮務主事（本郷キャンパス）の高熊教授です。

同じく寮務主事（射水キャンパス）の水本教授です。

専攻科長の遠藤教授です。

総務課長の小林です。

管理課長の竹山です。

学務課長の松梨です。

学生課長の山田です。

その他、総務課の事務職員が同席させていただいておりますので、よろしくお願いいたします。

引き続きまして、席上に配付しております資料の確認をさせていただきます。

(資料確認——記事省略)

【林事務部長】 本日の会議は16時までを予定しています。

本日の議長ですが、ご選出いただいております遠藤富山大学長にお願いしたいと思えます。

遠藤先生、よろしくお願いいたします。

(遠藤議長 議長席へ移動)

3. 議 事

[1] 富山高等専門学校 平成25年度 年度計画実施状況について

[2] 富山高等専門学校 平成26年度 年度計画について

【遠藤議長】 よろしく申し上げます。

今日、及川委員は初めてでいらっしゃいますね。

【及川委員】 そうです。

【遠藤議長】 代理の方もいらっしゃいますが、どうぞ皆様、さまざまなご意見をよろしくお願いいたします。

先ほど石原校長からお話いただきましたように、教育界は、さまざまな課題を抱えています。大学も同様で、私も悩みながら「何とかなる」という思いで学長職を務めております。

教育ということで、若い諸君を何とか元気にしていかなければいけないということで、明るく楽しくやれたらいいと思っております。

本日の議事を進めさせていただきます。どうぞご協力、よろしくお願いいたします。

初めに、富山高等専門学校年度計画について、平成25年度の計画実施状況及び26年度計

画概要を石原校長からご説明をお願いします。

【石原校長】 どうもありがとうございます。

先ほどご説明させていただきましたが、透明なクリアファイルでとじた冊子の11ページから26ページ、第2期の中間計画が終わりましたので、その実施の結果についてのご説明を最初にさせていただきます。適宜27ページから具体的な資料がついておりますので、説明の中でページ数を申し上げますので、恐れ入りますがそちらをご覧くださいと思います。

まず、11ページをご覧くださいと思います。第2期は平成21年度から始まっておりまして、21年、22年、23年、24年、25年度で、本年の3月でちょうど第2期中期計画が終わったこととなります。5年です。平成26年4月から新しく第3期が始まっていて、これが30年度まで続くことになっております。

簡単に表のデータの構造だけ申し上げますと、真ん中から下の方にページ数がございます。上の方に何がございまして、(A)(B)(C)と赤字でアルファベットがついております。

(A)と申しますのは、平成21年から25年の5年計画の計画です。(B)と申しますと、昨年度の計画です。その右隣(C)が実際の実施状況です。一番右の列にございますのは、それを証明するデータになっております。

まず枠組みですが、一番大きい枠組みが青地に黒の文字で書いてございます。例えば11ページの2行目を見ていただきますと、ローマ数字で書いてございますが、これがⅠです。Ⅱ、Ⅲがございまして、25ページにⅡのセクションがございまして、これが大きなⅡです。26ページですが、ローマ数字のⅢの予算ということで、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲというローマ数字の枠組みになっております。

11ページに戻っていただきますと、ローマ数字Ⅰの下に、今度は黄色で囲った箇所が1、2、3、4とございます。例えば11ページが1です。1が非常に長いわけですが、20ページに2がございまして、1が教育で、2が研究です。3が21ページにありまして、社会との連携です。23ページに4、25ページに5と、Ⅰのローマ数字の中に1、2、3、4がございまして、そういう内容でございまして、時間を15分弱で説明させていただきたいと思っております。

11ページの最初の方に戻っていただきますと、「教育に関する事項」という黄色地の1番目、「入学者の確保」ですが、29ページ、31ページをご覧くださいと思いますが、い

ろいろ広報に努めているという内容が29ページ目。30ページ目は、昨年、高専では各学科のムービーを作成して、それをホームページ上にアップロードしております。こうしてPRをしている状況を報告しております。

そうしたことをいろいろ試みておりまして、例えば36ページを見ていただけますでしょうか。現在、本校に対して入学を志願する学生の年度における変化を示したものです。上の表で見ていただきますと、縦軸が倍率、横軸に年度をつけております。平成22年が左、右端が平成26年です。

確かに5年ほど前と比べますと、5倍から2倍という非常に幅がある倍率となっております。これは学科単位で書いておりますので、倍率の高いところもあれば低いところもあったわけですが、現在平成26年、右端を見ていただきますと、2倍から4倍の範囲に収束している状況でございます、平均値では3.1倍という状況です。全国の高専の中でも比較的高い倍率であると言えるかと思えます。

11ページに戻っていただけますでしょうか。(A)の欄の下から数えて1行目に②とございます。いろいろ学校のPRをさせていただいており、体験入学を呼びかけたり、オープンキャンパス、公開講座をしたり、出前授業等を行っている状況です。そういった資料が33ページにございます。

12ページをご覧くださいでしょうか。(A)という縦の列をご覧くださいと思います。これは私が先ほど申し上げました倍率のところですが、⑤というのが(A)の上から3つ目の行にございます。そういった目標に対して、現在、12ページの(C)の一番右端の列ですが、先ほど見ていただきましたように、3.1倍程度の倍率を確保している状況です。

13ページをご覧くださいと思います。(A)の上から2つ目の行に書いてございますように、基幹的な科目である数学、物理、英語などについて、いわゆる学習到達度試験を高専全体で実施しているということと、本校としてはTOEICの受験を進めている状況です。

右側の列の上から2つ目の行にございますが、受験状況等は38ページから42ページに書いてございますが、今、全体の60%ぐらいはTOEICの受験をしています。それをさらに増やす方向で今努力をしております。ですから、基幹科目の数学、物理、そういったものの方向、それから英語検定等の受験を進めている状況です。

上から3つ目の行の④ですが、授業改善のため、これはどこでもやっつけらっしゃるかもしれませんが、授業評価アンケート、教員によるピアレビューを実施して、その結果を

フィードバックして、よりよい授業を行うようにしております。

以上が授業関係ですが、その下⑤はいわゆるクラブ活動でございまして、クラブ等のスポーツ大会への参加等も支援しております。

57ページを見ていただきますと、いろいろクラブによっては強いところと弱いところがあるわけですが、57ページは本郷キャンパス分ですが、例えば上から5つ目の柔道ぐらいまでは上から順番に、優勝したり、2位になったりと活動の成果もあらわれてきております。次の58ページは射水キャンパス分ですが、バドミントンであるとか陸上に関する成果がかなり出ている状況です。

14ページをご覧くださいと思います。(A)の列の下から2つ目の④を見ていただきたいと思いますが、今、高専機構としましては女性の教員を増やす、最終的には3割程度まで増やすという目標を立てまして、これを実行しているところです。

私どもの学校におきましては、先ほど資料がございましたように、例えば女子学生に対するこういうパンフレットづくりであるとか(女子中学生向けリーフレット『富山高専で夢を実現させてみませんか。』を提示)、男女共同参画事業を実施しているとか、この8月25日、1か月後ですが、高専女子フォーラムという行事を富山市の国際会議場で実施する予定です。東海北陸の8高専が協力してこれを進めている状況です。

15ページを見ていただきますと、(A)の上から2つ目の行に⑦とございますが、これは学生の分ではございませんが、教員に対する研究の充実ということで、国内外の派遣をいろいろと進めているところです。去年は、例えばイギリスのSouth Eastern Regional Collegeや、ハワイのカウアイ・コミュニティ・カレッジ、ハンガリーのブダペスト工科大学といったところといろいろと交流をしようということで話を進めているところです。

16ページをご覧くださいと思います。(A)の列の上から2つ目に⑥とございまして、インターンシップの取組みを充実させようということです。現在、本科の学生は大体60%はインターンシップを受けて卒業する。これをさらに増やしたいということで80%ぐらいを目指す。専攻科の学生においては、例えば本郷キャンパスにおいては必修化しておりますので、必ずインターンシップへ出かけるという取組みをしております。

その具体的な内容ですが、16ページの(C)列の右側の上から2つ目に「11. 企業及び海外インターンシップ実施状況」が62ページに書いてございます。これは割愛させていただきます。

17ページは省略させていただきます。

18ページをご覧いただきたいと思います。先ほど申し上げましたが、(C)列の上から2つ目のところに①から⑥まで書いてありますが、①をご覧いただきたいと思います。校長裁量経費等によりまして、TOEIC対策講座を組織的に受験するように進めているところです。二度申し上げることになるかもしれませんが、そういう状況です。

20ページをご覧いただきたいと思います。「研究に関する事項」です。教員の研究活動を促そうということで、73ページ、74ページをご覧いただきたいと思います。同じくその下にも75ページ、共同研究というのがございますので、それも合わせてご紹介したいと思います。

まず、73ページをご覧いただきたいと思いますが、科研費の採択状況でございまして、上のものが平成26年度で、一番下の行に「計」と書いてございます。そこを見ていただきたいと思いますが、左から3つ目の列に「新規採択数 12」「継続採択数 15」ということで、現在「採択総件数 27」と書いております。去年は新規採択件数がもっと少なく7件でございましたので、少しは増えている状況です。これで満足するわけにはいかないので、基本的には、新規採択件数を20件程度は目指したいと思っているところです。

今、教員が130名程度おりますが、申請をする教員がおおよそ半分弱です。半分弱でありながら、採択率は40%近くというおかしな構造になっておりまして、もう少し組織的にこ入れをしないといけないと思っております。

75ページを見ていただきますと、共同研究や受託研究の実施状況がございまして、縦軸が年間の件数で、横軸が年度です。その表から見ていただきますと、共同研究の件数としては大体43~44件という状況でございまして、少ないと思われるかもしれませんが、実はこれは高専の中では2番目か3番目に多い件数です。ですからこの辺も少し成果が上がっているところです。

戻りまして21ページを見ていただけますでしょうか。

21ページは、「社会との連携」と黄色の背景で記載している箇所でございます。昨年から実施したものとしましては、(C)の上から2つ目の①ですが、新しく企業向けの教員紹介冊子を作成して、これをコーディネーターに企業訪問のときにPRをしていただくというのを始めております。

その下の②を見ていただきますと、これから、先ほど申しました国際交流がありますので、日本の国だけではなくて、英語版のパンフレットも作成しているということです。

同じく21ページの(C)の下から2つ目の行を見ていただきますと①、技術振興会の企業

というのは、昨年度の初め4月には130社程度でしたが、現在は184社ほどになっていると。50社ほど1年間で技術振興会の会員企業を増やしました。

②は、タイに進出している県内企業さんのお世話をするという事で、これは高専機構からのプロジェクトですが、「T I E－U Pプロジェクト」を開始して、本年度までで終わる予定です。

22ページをご覧いただきたいと思います。(A)の上から2つ目の行に⑦とございます。その右の列に「GLOBAL VISION」とございます。先ほど事務部長からご紹介がありましたように、現在私どもの学校と国際交流をしている関係国を取りまとめたものでございます。(パンフレット『GLOBAL VISION』を提示)、海外交流、海外インターンシップ、異文化実習といったものをどんどんこれからグローバル化に向けて進めていきたいと思っております。

23ページ、24ページは割愛させていただきます。

冒頭に申し上げたことにつながるわけですが、25ページのローマ数字でⅡとございまして、「業務運営の効率化」ということです。そこの(C)の下から数えて一番初めの行です。昨年もそうでしたが、一般管理費が3%カット。全体としては1%ということで、昨年からは随分予算が減っている状況です。年間で言いますと6,000万円強減ったという厳しい状況です。本来はそんなにたくさん減らないのですが、そういった中でやっていかなければいけないということです。

ここまでが平成25年度の実施状況のご説明です。

続きまして81ページをご覧いただきたいと思います。先ほどのものと違いましてA4の縦の表になっております。主なデータの構造は、やはり青地に黒の文字、これが一番大きい範疇になっております。ローマ数字でⅠ、Ⅱ、Ⅲとございまして、その中に黄色地で文字が1、2、3、4と、先ほどのものと同等です。

順次ご説明したいと思いますが、上から1つ目の行に、「入学者の確保」です。入学者の確保のところの(B)列上から2つ目、①を見ていただきますと、富山高専のPRのために非常勤の教職員を雇用しております。この7月1日にお一人雇用しまして、現在、県内の中学校を定期的に訪問していただいて、高専の良いところをPRしていただく役割です。今まで技術的なPRをコーディネーターに行っていたのですが、人材獲得においてもそのお力を借りたいと考えています。

②は中学校の校長先生方をお願いしたいと思っておりますが、中学校の校長先生、進路

指導教員の先生方をお招きして、いろいろ本校の教育研究の実情を見ていただいて、より優秀な学生さんを高専で養成していきたいと考えております。

(A)の上から2つ目の②のところの(B)の①ですが、在校生の父兄の方々、地域の住民の方々、中学生の方々に高専へ来ていただいてPRする。毎年2回ほどオープンキャンパスを、夏には8月7、8、9日と1回やっておりまして、11月には秋季のものをやっております。そういった機会を利用して、学生さんが興味を持つ実験等をお見せしたいと思っております。

(A)の下から3つ目の行に⑤とございますが、(B)の方を見ていただきますと、高専女子フォーラムを8月25日月曜日に国際会議場で実施します。女子学生の数をもう少し増やしたいと取り組む事業です。ここでは女子学生を採用していただいている企業の方々にもご講演いただくことになっておりますので、高専女子学生にはいろいろな将来の歩み方があるんだということをPRしていきたいと思っております。

81ページの下から2つ目の行に「教育課程の編成等」とございます。その(B)列に①②③④と書いてございますが、そういった点検と見直しを図るということを今考えております。

81ページの(B)の一番下ですが、専攻科においても英語の授業を具体的に実施しております。昨年も外国等に派遣していた教員が帰ってまいりましたので、そういう人には義務としてやっていただくというふうにしております。

82ページですが、これはまた少しPRさせていただきたいのですが、(A)の上から4つ目、「優れた教員の確保」と書いてございますが、(B)列に、採用教員を育てるための学内インターンシップ。これは新しい教員を採用した場合にも公務に慣れていただくために、あえて最初から一部屋を与えないで、複数の人たちでインターンシップを受けていただくということをやっています。

その下に②とございまして、実は高専独自のものかもしれませんが、優秀な学生、修士段階でいると思いますが、その方々は大体企業に就職するケースが多いのですが、修士でも高専へ就職できますということで本校に勤めていただきながら、3年間で博士号を取っていただく。3年間任期をつけますが、博士学位取得後に任期を外すというやり方を今進めております。

82ページの(B)の欄の下から3行目をご覧ください。これも先ほどの女子学生の採用についての話です。ご覧いただきますようお願いいたします。

83ページの(A)の列の下から4行目に⑥と書いてございます。インターンシップの取組みを積極的にやろうとしております。今6割程度の学生がインターンシップを受けておりますが、これをもう少し、8割まで増やしたいと考えております。

84ページに関しては割愛させていただきます。

85ページをご覧いただきたいと思えます。「研究や社会連携に関する事項」ということで、この事項も第3期でかなり力を入れたいと思っております。その中の(B)の①ですが、優れた外部教員を招聘して、本校教員の研究力、外部資金獲得能力の向上を図るということで、大学等をおやめになった方々で意欲のある方にぜひこちらに来ていただいて、若い教員と一緒に研究に取り組んでいただきたいということを今考えているところです。

下から4行目、②の(B)のところですが、先ほど冒頭で説明させていただきましたが、企業と連携して、製品開発のための実践教育を企画する、地域の企業さんがお困りになっている課題を高専と企業が連携して製品開発を行い、その中に学生諸君も参加させることによって、学生を学内インターンシップとして取り込もうという狙いがあります。この4月1日から、そうしたことを今やっています。

85ページの(B)の下から2行目①ですが、製品開発本部において地域中小企業が要望する製品の開発を行う、外部資金の獲得を目指す、こうした活動を通じて地域において信頼される高等教育機関と認知されるよう努めるということを今やろうとしております。製品開発本部は今年の4月から設立しておりますが、そのお披露目を、7月25日午後1時から5時の間で開催する予定です。パンフレットがございまして、(パンフレット『製品開発本部 設立』『製品開発本部設立記念セミナー』を提示)、こちらがその開催通知です。

86ページをご覧いただきたいと思えます。ここも少し力を入れているところがございます。「国際交流等に関する事項」です。先ほどご紹介しました『GLOBAL VISION』に概略を書いております。

今年の9月には中国の瀋陽にございます東北大学で国際会議を開催する予定にしております。これは本校単独で東北大学とともに行います。また、本年11月にタイのバンコクにございますキングモンクット工科大学(KMITL)と国際会議をやる予定にしております。今回、学生諸君は参加しませんが、いずれはそういった教員間の研究との交流をきっかけとして、これとは別に並行して学生諸君の交流も実施していこうとするところです。

86ページの(B)の上から2つ目の行ですが、海外から来た場合にも学生寮の空いた部屋に学生諸君を泊めて、3週間、1か月から長くても3か月の間、交流を始めているところ

です。本校の学生も向こうの方に出かけるというようなことをやっております。

87ページ、最後のページですが、ローマ数字でⅢという大きい項目で「予算」とあります。これが実は悩ましいところですが、毎年予算が最低限でも1%ずつ減ってまいります。今年には特に6,000万円強減りましたけども、このままでは立ち行かないということで、自立的にお金を稼ぎたいということで、87ページの(B)の下から一番目の行ですが、製品開発本部において企業の要望に応じた製品開発行い、その対価を外部資金として受け入れるとしております。協力した教員にはその一部を研究費として還元することとします。

こういったものづくりだけではございませんで、製品開発本部において企業の要望に応じた企業人教育を行うとしております。幾つかの教育プログラムを用意しておいて、その企業の要望に応じたプログラムを教員が作って、そこで貢献できないかということで始めているところです。

大体時間が来ましたでしょうか。説明はこれで終わります。

【遠藤議長】 ありがとうございます。ここで10分間の休憩をとらせていただきます。

再開後、それぞれの委員からのご意見を項目ごとにいただいてまいりたいと思っておりますので、どうぞよろしく申し上げます。

午後2時55分に再開させていただきますのでよろしくお願いします。

〔午後 2時46分 休憩〕

〔午後 2時55分 再開〕

【遠藤議長】 今ほどは石原校長から非常に多くの資料を端的にご説明いただきましてありがとうございます。

それぞれの項目につきまして、皆様方からご意見あるいは質疑を行わせていただきたいと存じます。

初めに、「入学者の確保」という話題について、富樫委員からお願いします。

【富樫委員】 よろしく申し上げます。

今ほど石原校長から、中期計画に従って力を入れておられる取組みをお伺いしました。資料も大変たくさんありまして、まだまだその一部だけのお話だったかと思いますが、中学校現場におりますと、子どもたちは高等学校と5年間の貴校とでは少し距離があるよう

なところが見られます。

そこで、進路指導をする際に、富山高専さんの取組みというか特徴だとかそういうものを子どもたちに情報として提供する場合、学校の方から先ほども説明にありましたように、年2回回ってきてご説明されるということ、あるいはオープンキャンパス、入学説明会等があるわけですが、私も校長室で話を聞いたりしておりましたが、時間も短く、概略的なことしか分からないものです。先ほどご説明にありました中学校の校長あるいは進路指導の教員あるいは三学年の主任が実際に御校に伺って、教育や研究の状況を見るということはとても大事なことと思います。それをもとにして、学校に帰って学年の先生たち、あるいは子どもたちに御校の特色ある取組みを説明できるということがあるかなと思います。そういう意味でいい取組みであると思っております。

2つ目ですが、私、堀川中学校に勤務しておりますが、昨年説明会に来られたときに、ほかの県立高校と一緒に日に行ないました。ほかの高等学校は先生がお一人かお二人来られて、立って説明されただけでしたが、富山高専から来られた方は、堀川中学校の卒業生と一緒に来られてですね、対談のような形で学生さんの生の声、今一生懸命どういうことに取り組んでいるかという生の声を聞かせていただきました。うちの生徒たちは顔を上げて興味深く聞き入っていた姿がとっても印象的でした。先ほど校長からお伺いしましたように県内の様々な中学校から進学しているということですので、5年生か4年生の学生と一緒に行って、大変やりがいのある学校であるという説明があって、生徒たちも、特に工業系の学習に興味を持っている生徒は結構おりますので、そういう子どもたちにとっては目を開かされる場面だったのではないかと思っております。

もう1点ですが、これは今までずっと言われてきたことかもしれませんが、入試の件です。これは全国の高専で同じ日にやっておられると伺っていますが、本校は結構高専志望の子がいて、今年は30名近く受けております。そうすると、進路指導をする際に幾つかのパターンを事前に考えておかななくてはなりません。受験して、結果はどうであれどうするかと、それから合格したらどうするか、ほかの県立高校は受験しないのかあるいは別の高校を受験するのか、合格しなかったらどうするか。進路指導の際、様々なパターンを本人と保護者と一緒に考えます。中学3年とはいえ子どもですので、いざ合格発表があった後、前に話し合っていたことが揺れることがあります。この場合、合格発表が学校へ届いてから保護者を交えて話をする時間が余りにも短い。私が今の学校に赴任して痛感したところです。もしできるならば、日程的なものが少し考慮いただければ大変ありがたいと

思っております。

以上です。

【遠藤議長】 全般はご評価いただきました。ぜひこれからも良い形をとるということでお願いします。

【石原校長】 そうですね。3番目のお話ですが、入試の日程というのは高専全体で統一試験を用いております、日程をずらすことは難しいと思っています。その辺が一つの欠点ということと、実は残念なことながら、県立高校と高専と両方に受かった場合にどうも県立高校に行かれるケースが多いと私は感じています。要するにもう少し本校の良さを見つけ、情報を提供することができればと思っています。

5年間ということ、5年の本科を出ますと就職する学生が大体半分おまして、残り半分が他の大学へ編入する、あるいは専攻科へ行く学生が大体半分おります。この率は富山高専としては全国の51高専の中では10番前後です。専攻科へ進学した後も大体半分程度は大学の修士課程へ行きます。その数も5割くらいいます。そうしたいろいろのキャリアがあるということも教えてあげたい。

それから外国の大学へ行く進路もあるということ、1つの事例として今後ぜひ作りたいと思います。日本の大学院ではなくて外国の大学院への進学もあり得るということです。それにはTOEICの点数をある程度持っていないと受験資格がないので、今、力を入れているところでもあります。全員というわけではございませんがそういったことも視野に入れております。

最初の話につきましては、しばらくやっていたわけですがご無礼にならない程度にご相談させていただき、どういう形がいいのか、またざっくばらんなご意見等をお聞かせ願えればありがたいと思っております。

卒業生についてはご指摘のとおりだと思っています。やはり中学校の先生方も自分の教え子が来ると和みますね。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

それでは、佐野委員から「教育課程の編成」についてお願いします。入試のことも非常に大きな話題だと思っておりますが、いかがでしょうか。

【佐野委員】 県の教育委員会県立学校課では県立学校の高等学校、特別支援学校の学習指導、進路指導、特別活動、こうした業務をしているところです。

本日、高専の教育活動を教えていただきまして本当に参考となりました。

少し思ったことが3点ありまして、1つは授業評価、授業改善といった点です。県立高校等でも生徒による授業評価をなるべく推奨しているところでありまして、本県では全日制43校中30校で生徒による授業評価を取り入れているところです。こういった評価を活かして教員の授業改善に少しでも役立てたいということで取り入れているものです。長野県などでは今年度から県主導で全ての県立学校に生徒による授業評価を導入するといったことも聞いています。

資料の43ページ以降でしょうか、子どもたちの授業評価の集計結果も載せておられます。本当に綿密に分析されて授業改善に活かしておられるのが大変すばらしいと思ったところです。

もう1つは、ピアレビューということで評価シートも作成して実施しておられます。県立学校等においては互見授業といいまして、教員同士で互いの授業を見合うということをしていますがここまではなかなか進んでいないので、県立学校等にも少し紹介をして授業改善に努めていきたいと思ったところです。

2つ目は、資料の11ページの(C)のところにPBLの実践を書いてありました。課題解決型学習、日本語に訳せばこうなるかと思っております。

やはり発達段階が上がりますと、従来の講義、実験、演習の積み上げ、いわゆる詰め込み型教育になりがちです。しかし昨今、こういった時代ですとなかなか詰め込み教育の限界があるような気がしております。

PBL、課題解決型学習は、恐らく学生生徒が目的意識を持って意欲的に取り組むことができる学習スタイルではないかと思っております。同時に、モチベーションが高くなったり、あるいは通常の講義主体の授業では得られないような力、課題解決力やプレゼン能力、論理的な思考力といった力がつくのではないかという思いをしております。

アメリカのあるところの調べによると、授業から得た内容を覚えているかを半年後に調べたときに、どういった学習スタイルが一番記憶に残っているかといった調査結果があります。一番低いのは、「ただ黙って講義を聞く」というので5%。一番高いのが実は、「他の人に教える」で90%の率を残しているという研究結果があります。高いほうから言うと、「他の人に教える、あるいは自ら体験する、グループ討論」、こういったことが高くなっているわけで、いわゆる受動的な学びから能動的な学びへどう転換していくかが大事になってきている時代と思っております。

私たちがよく学校へ行ったときには、やはり教員主体の講義主流の授業から、子どもた

ちの活動、ペアワーク、グループワーク、学び合い、そういった活動を取り入れた授業を進めているところです。

今日、取組み等を見せていただきまして、また参考に県立高校の方でも進めていきたいと思った次第です。

最後に、特別活動の面で、ボランティア、社会奉仕活動などにも熱心に取り組んでおられます。この学校要覧には（冊子『平成26年度 学校要覧』を提示）、教育目標として本校で育てたい生徒像が書いてありますので、こういった点を踏まえましても、ボランティア、社会体験、こういった活動も本当に有効に働いていると思った次第です。

以上です。

【遠藤議長】 学校側はいかがでしょうか。

【石原校長】 お褒めの言葉を幾つかいただきまして、本当にありがとうございます。

授業の改善に関しましては、私どもも非常に力を入れておりますが、しかし、興味を示さないといいますか、授業の中にも成立しないという学生もいるやに聞いております。何かこの辺、先生方の方で少しフォローしていただけますか。

【西教務主事】 教務主事の西です。よろしく願いいたします。

授業について興味を示さない学生もいますが、そうした学生につきましても補習等を行いまして、どこに興味を持ってないのか、どこが分からないのか、そこを本人が分かるようになればまた興味を示してくるようになると思っています。そうした取組みを地道に進めていけば、授業中、興味を示さない学生もだんだんと興味を持ってくれるのではないかと考えております。

PBLにつきましても、現在、専攻科生を中心に行っております。学生にとっては普段の講義とは違う取組みですので、どういうふうにしていいのかなかなか理解できません。ある程度方針というものをまず示して、それに従って学生が自立して考えてやっていくとしております。そして、少し道を外れるようであればそこをまた教員が修正してあげるとうまく進んでいくと思います。完全に学生だけで能動的にするとレベルが高過ぎますので、これがコツだと思います。

以上です。

【石原校長】 確かに授業をするというのは難しい部分があって、実は私どもも、どうしても何%かは基礎学力が足りない学生がおりまして、彼らに対するフォローをもう少し組織的にやりたいということで今進めつつあります。まだ十分ではございませんが、最初の

ところでつまずいて転んで、その後、単位が取れなくて授業に出にくくなってくるというパターンが幾つかあるようでございます。できる限り、もう少しフォローする体制はないかということが一つございます。

PBL教育についてはおっしゃるとおりであると思います。知識を教えても知識の中身が分かっていないので、具体的には分かっていることにはならない。統合する前まではそれなりにやっていたのですが、実際、私どもも物理、化学等を今まで少しおろそかというか、少しやめていた部分もある。そこをもう一度復活して見直そうということが一つ。それから、卒業研究、専攻科生の研究、これはまさにある意味ではPBL教育そのものなので、やはりそこで一番力がつくのだらうと思っています。狭い分野だけの話ではなくて、1つのものをやると次から次といろいろなものが発生してきますのでいろいろな知識が身につく。同時に頭を整理して皆さんの前で説明しなければいけない。そうするとそういった能力が自然と身についていきますので、自発的にいろいろと興味を持ってやっていく、そういう人材に育っているのだらうと思っています。ただ、今のところ、まだ十分ではないと思っています。

【遠藤議長】 この点は日本の教育界の大きな課題で、大学も一緒です。どこがどうなっていくのか不安もありますがいろいろ改善もされてきていると思います。教育の形、今のまま継続ではだめだらうということだけは思っています。

次は「優れた教員の確保」ということで、松本委員、お願いいたします。

【松本委員】 それでは、「優れた教員の確保」の部分で少し教えていただきたいというか、少しコメントを言わせていただければと思います。

非常にいろいろな施策をされていて、我々としてもぜひ参考にさせていただきたいという部分もあり何点か教えていただきたい部分とコメントをさせていただきたいと思います。

優秀な教員の採用ということで、博士の学位を取得している方とか、多期間、海外の勤務経験を有する方をできるだけ採用するという話ですが、優れた教員というのはどういうことなのかと考えます。例えば教育にもものすごく優れた教育力を持った先生もおられるだらうし、研究力に優れた先生もおられるだらう。学校運営やマネジメント、いろいろ能力があると思いますが、どういう方を本当に必要としているのか、その辺がしっかり定義づけされた上での採用であれば非常にいいと思います。その辺が漠然としていると採用された先生方も入ってからどう動いていいか少し悩まれる部分があるのではないかという気がします。

今後、外部資金獲得とか共同研究もやらないといけないという話を聞くと、やはり研究する力と、あとは企業さんとのつき合いができる人というようなことを考えるのか、先ほどの多期間の海外の勤務経験と合わせて、例えば民間企業の経験者とか、そういう視点もあるのかという気がして教えていただきたいのが1つです。

それと、先生方がFD研修というのを結構されていて外部の研修会に出て勉強してこれられていろいろな機会を作られていて素晴らしいと思います。外部のFD研修会で得られた情報をどう全学の先生にフィードバックしているのかというのが見えなくて、その辺を教えてください。

もしかしたら、ここの学校での課題というか、例えば先ほど出てきておりましたが、少し基礎学力が足りない学生がいるねとか、やる気のない学生も少しいますねなど、この学校の本当の教育課題をテーマにして、この学校の中で、どうしよう、ああしよう、こういう取り組みをやっているとか、そういったことを議論されるような形に展開されるといいかなど。うちの大学でも、まさに今その辺のところではいろいろな課題があり行っていますが、やはりほかのところでのやり方というのは参考にはなりますが、自分たちの学校の中での課題とまた少し違うので、自分たちの学校の中の本当の課題をどう皆さんで取り組んでいけるかというか、そういう形で展開できると非常にいいと思っております。

【石原校長】 最初の質問は、どういう方を優秀な教員と考えるかという定義の話ですが、私は、一つ一つを分けて考えることはできない、やはり総合力ではないかと考えています。教育と研究は切り離して考えることもできますが、基本的にものを教えるというのは、自分が経験したいろいろなものの発見を通じて学んだことを、指導する相手に伝えられるかということもかなり重要だろうと考えています。ある研究室に所属すると、大体みないい人材として育てているというのは、まさにそのとおりだろうと思うところがあります。

あと2つについては副校長からお願いします。

【成瀬副校長】 FDにつきましては、出張にあたり特にFDに関するものについては必ず報告書を出して共有するというをやっています。幾つかに関しては、月1回の教員会議がありますので、できるだけそこで報告していただくということを具体的にはやっています。

それから、FDの研修会等で諸問題があります。例えば本校で問題になっていたのが、ネットワーク絡みのいろんなトラブルで、具体的な問題を学内で事例を出して担任がどう処理をしているかということをお話し合う研修会を昨年度やりましたら先生方でいろいろと

活発なディスカッションになりました。

【松本委員】 身近な問題かどうか非常に重要という気がします。

【遠藤議長】 そうですね。

教員会議とおっしゃいましたが2キャンパスに分かれてやっていたらっしゃるのですか。

【成瀬副校長】 基本的には各キャンパスに月1回ありますが、年に1、2回、全員が集まってやります。

【遠藤議長】 全体の教員が集まって、そういうところで盛んに議論が起こるのですか。

【成瀬副校長】 ええ。それとは別にFD研修会をやります。全員を対象にして。

【遠藤議長】 全員が集まって実施される、全員が集まるというのがキーワードですね。組織が大きくなると全員というのは難しい。そうすると関係が希薄になってしまいがちです。全員が集まるとはすばらしいですね。

【松本委員】 そうですね。

【遠藤議長】 続きまして、「教育の質の向上及び改善のためのシステム」ということで、正橋委員、お願いいたします。

【正橋委員】 まず、来年春、入社していただける方をお一人決めさせていただきました。どうもありがとうございます。

企業側からの見方ということになりますが、いろいろと状況をお聞きする中で、非常に海外との接点があったり、TOEICを積極的に受験させるというお話がありまして、どこの企業でもそうだと思いますが、やはり気持ちよく海外勤務に応じてくれる人というのがどこの会社でも今は求められているのではないかと考えています。

そういう意味では、高専さんは中学を出られてからの教育という部分で考えると、5年間あるので、結構いいプログラムができれば5年で英語の取得もかなりいけるのではないかと考えています。TOEICですとスピーキングが普通はない状態なので、中学英語を勉強しながらやっている程度だとあまり役には立たないと思っています。

資料を読ませていただくと、コミュニケーション力や積極性の向上というものもやっていきたいと書いてございます。それを何とか英語力の向上と合わせて教育がうまくできれば、話せる、交渉ができる、あるいは外国の人とも仲良くなれる、学生さんが会社の方に来ていただけると、とても本人にとってもいいことではないかと考えています。

逆に今、日本人でもほとんど話せない状態ですので、その5年間を活用して教育ができれば、仮に学問の方がそうでなくてもそういう方向で伸びていく方がいると思います。も

ちろん射水の方ではそういう教育もされていますが、技術をやりながらそういうことを学んでいていただきたいと思っています。

語学で言いますと、中国語も射水の方ではやっていらっしゃる。2、3週間ほど前に30過ぎの女性で、中国に7、8年ぐらいいて頑張っていた方が戻って来られました。当社に転職という形で来ていただきましたので、そういう意味ではなかなか得がたい方に入ってきていただいております。そういう意味では、技術も重要ですが語学を合わせた形で教育をしていただきたいというのが強く思っているところです。

以上です。

【遠藤議長】 いかがでしょうか。

【石原校長】 今、正橋委員からいろいろご意見をいただいたわけですが、まず、私どもの開発した幾つかのプログラムが立山科学工業株式会社さんのご紹介で開発したものが多くありまして、マレーシア関係や、先ほど申し上げたハンガリーとの交流は、それをきっかけに広げてきているという部分がございます。まずお礼を申し上げたいと思っています。

基本的には語学と技術的なものと、あとは初めて外へ出たときに、自分を客観的に眺められるとか、あるいは何か知らないけれども全身で感じる、皮膚で感じるような何かがあるだろうと思っています。一番後のそれが大事と私は思っています。

【西田副校長】 最近、うちの学校は外国の短期の学生も受け入れています。研究室に入るわけですが、そういう方々と接する機会も増えましたので、学生にはぜひ活発に交流するようにと言っているところです。

今年から本郷の方も短期の留学生を受け入れています。彼らは日本語が話せませんので、そういう人たちと交流を行うことになります。

【正橋委員】 昨日、北アイルランドの方がお二人、当社をちょっと通っていかれました。

【遠藤議長】 私はお話を伺って、高専だからこそ、高専での5年間で何か若い人にできることがあろうと思います。

【正橋委員】 5年あると、一貫教育みたいな語学の教育ができるのではないかと思います。いかがでしょうか。

【石原校長】 一部の学科では、実は長い期間やっております。専攻科でも、工夫次第では工学系でも半年間の長期研修もあり得ると思います。

【遠藤議長】 最近、中学校の段階で会話をする時間が入ってきています。英会話で授業をする時間が加わってきているので、その教育を受けた学生が進学してきたときに、どう

変わっていくかにいろいろ期待がかかります。

では、次の話題に移ります。

「学生支援・生活支援等」につきまして、石山委員、お願いいたします。

【石山委員】 学生支援というと全て関係してくるわけですが、1つは入学者の関係になります。ご存じのとおり今年度の入学者は定員40名のところ46名。先生方にしてみると、30名から35名ぐらいの方が一番教育しやすいし指導しやすいのではないかという気がします。いろいろ規制があって当然定員割れはさしつかえるでしょうが、40名のところを46名もとってどうかということです。私はそんなに多くとらなくても38名ぐらいでいいのではないかと考えます。だから、学力もそれなりにある程度の人をとるということもあっていいのかと。わざわざ定員を増やしてまでとる必要がないような気はします。世の中の要望がどの辺にあるのかということもありますが、学力のない人が入ってこられても困る話ですので、多少少な目でいい人を集めるということも必要ではなかろうかと考えます。

それから、今言われているように、英語の教育をできるだけやって、英語をある程度話せるようなことをやりなさいという話が出ていますが、私のころはいわゆるくさび型と言われていますが、1年のころからかなり難しい専門教育を受けて5年間専門教育をしてきました。ある程度英語の方に力が入ってくると、当然全体の授業というのは時間数が決まってしまうので、英語の授業が非常に重要だということはよく分かりますが、では専門課程を少なくするのかということも含めて考えていかなければいけないと思います。

学生支援の関係でいくと、授業料の免除だとか各奨学金のことを一生懸命やっておられる。これは当然やっていただかないといけないわけでありまして、教育格差というのが今言われていまして、教育の受けられない人が連鎖でどんどん受けられなくなってきている。そういう方々も優秀な方がたくさんいるわけですので、授業料免除やそうした支援をしっかりとPRしていただき、支援を受けられるようによく分かるようにPRしていただきたい。

それと勝手なことですが、グラウンドの整備をもう少しやっていただければと思います。運営諮問会議委員の方々、トラックを見ていただければ分かると思いますがあまり良い状況ではありません。

高専というのは、クラブ活動もある程度重視して体力をつけていくことは技術者としては必要だろうと思います。射水キャンパスのトラックは非常に良いわけでありまして、本郷キャンパスのトラックよりもよくなっていますので、できれば良い状態にさせていただ

ればと多少感じたところがあるわけです。お願いしたいと思います。

【遠藤議長】 具体的な貴重な意見が幾つかありましたが、いかがでしょうか。

【石原校長】 まず、一番目の方と最後の方だけ私から。

私は、学校の力というのは学生の数がかかなりきいていると思います。点数はある点数で切って、その下は能力がないかということと必ずしもそうでもない。今のところ130%ぐらいまで入れてもいいと思っています。それを強い教育力で補って上げていく。専攻科も同じで、これが私の基本的な方針です。石山委員のご意見は分かりますし、そう言われる方もいらっしゃると思います。もちろん定員割れは致命的ですからたまたまそういう結果になったのかもしれませんが、我々としては中へ入れてから育てるところで勝負したいと思っています。

最後のグラウンドの件は、やはり予算の問題がございまして、なかなか費用が出せない状況です。そこが一番の問題です。

【成瀬副校長】 TOEICと語学力に関しては、授業は授業として決まっていますので、いかに授業にプラスするもの、例えば短期留学生に教室の中に入れてもらうということを通して英語力を上げていくということなので、今のところ、決して専門をないがしろにしているということにはなっていないと思っています。

【遠藤議長】 難しい話題だと思います。

石原校長、確認ですけど、入学者の数の選定に、幅は幾らあってもいいのでしょうか。定員が40だったらプラスマイナス何%とか。

【石原校長】 130%まではいいと思っています。

【遠藤議長】 130%までいいんですか。

【石原校長】 ええ。大学とはちょっと違って。

【遠藤議長】 全く違いますね。大学で130%入れると、入学料とか30%分の経費の返却を求められますが。

【石原校長】 そこは違いますね。

【遠藤議長】 なるほど。分かりました。

それでは次の話題に移らせていただきます。

「教育環境の整備・活用」ということで、及川委員からお願いいたします。

【及川委員】 先ほどの学生支援とオーバーラップする部分がありますが、商船学科の船員としての就職率アップというのが上がっていて、具体的な学校の対応等が出ています。

4年生ぐらいから企業説明というか、そういう説明会の開催というのは検討しておられませんでしょうか。

【遠藤専攻科長】 専攻科長の遠藤です。商船学科所属ですのでご説明させていただきます。

船員としての就職率の向上というのが1つの目標になっている中で、4年生ぐらいですと商船学校だけでも企業そのものが多くまとまっては来ないのですが、年間8回ほど、商船学科4年生向けの企業説明会を個別に開催しております。あとは、意識向上ということでキャリア教育の教科書を書きまして、1年生、2年生、3年生のホームルームで使っています。それから先生方が実習に向かう。今年から変則的な実習になりましたが、最終的なゴールである船員として就職する人たちに向けてのキャリア教育、企業説明会、こういうものを総合的に、意識の向上、意欲の向上につなげるような活動としてやっております。それを少しずつ効率的に、効果的にやっていくように努力しています。

以上です。

【及川委員】 あともう1点、先ほどの石山委員と重なりますが、奨学金制度に関連して、海外インターンシップを実施することによって、参加の学生に非常に効果が出ているというのはいろいろなところから聞こえてきますが、費用負担といえますか何か奨学金という形で取り組んでいるのでしょうか。

【石原校長】 インターンシップの場合は、基本的には自前です。プログラムを用意するのは学校で、学校の教員がつき添いで行かなければなりません。そのときの費用は学校で支出するようにしています。何らかの外部資金をいただければ、そこから支出することもできますが、要は、学生諸君が何十万円というお金を自分で払い、どう生きたいか、そういう考え方を持っています。全て補助するお金もありませんので、受益者負担のやり方で行っています。

ただ、維持する場合もやはり毎年のように教員がつき添いで行かなければなりませんので、私どもとしては、50周年の基金の中からその辺の予算をグローバル人材育成基金という形でそこに充てていきたいと考えております。

【及川委員】 学生は参加したいという意欲はあるものの、コスト負担というところでは結構重いということで、何か方法はないのかということをよく聞かれますが、高専機構とかそういうところでも特に設けてはいないですか。

【石原校長】 高専機構は、今年については実は10人ほど独自にやっぴまして、三菱と

か割と大手の企業がインターンシップを受け入れています。数的には5、6名の数で出している。それは何がしかの渡航費も出している。ただ次年度からは、これは難しいねという話が進んでいまして、いずれは受益者負担へシフトしていくという状況です。

【及川委員】 分かりました。

【遠藤議長】 具体的に言うと、海外への学生への留学の支援という形で今年から始まった、「トビタテ！留学JAPAN」という事業は、高専も関係がありますか。

【石原校長】 関係あります。

【遠藤議長】 文部科学省が中心になって企業から何十億円集め、それを海外に派遣するための資金として、全国で300名規模で学生を募集しています。これも全て企業頼みで、各学校が今までやっていたようなことを文科省がまとめてやっています。文部科学省の審議官が企業回りをして、企業側からは各大学に出せばいいのか、文科省に出すのかとの質問も出てしていると聞いています。国に財源がないことは確かだと思いますので、新しい形の発展を期待したいと思います。

続けさせていただきます。

「研究や社会連携に関する事項」と「国際交流等に関する事項」についてお願いしたいと思います。藤堂委員、いかがでしょうか。

【藤堂委員】 事前に資料を見せていただいて、今日、石原校長からもいろいろ説明を聞いて、海外インターンシップ制、国際シンポジウムの展開など国際化を積極的にやられておりますので、私があまり言うこともないかなと思いますけど、1つ私の意見を少し述べさせていただきます。と思います。

昨年、中国の蘇州にある私どもの会社ですが、富山大学と金沢大学の合同視察の機会があり、学生と教官が一緒に来られ、その際、学生さんの海外志向が強く、活発な質疑応答がされたと聞いております。

やはりこうした取組みを行う上で、海外に関心のある学生さんを選んで実りのある活動にする必要があるのではないかなと思います。

また、受け入れ先の企業のニーズや研修内容を調べるために行きつつ、振興会のネットワークを活用する手もあるのではないかなと思いますので、ぜひ活用していただきたいと思っています。

また、日本から外に出て、異なる文化や驚くほど速く展開する経済に若い世代が触れることは、きっと今後の人生に役立つのではないかなと思います。

今後は、台湾、ASEAN地域との結びつきが強くなると思いますので、こうした地域も考慮する必要があるのではないかと思います。

派遣の機会も、高専だけでなく富山県内の大学など、連携できるネットワークづくりも検討されてはいかがでしょうか。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

貴重な意見をいただきました。

【石原校長】 今ご提案いただいたような内容を、ぜひ本校技術振興会の企業の皆様方とも相談させていただきたいと思います。

研修先の候補企業を多く抱えていて、これからもう少し量的に増やすという方向が出ているということ、コンソーシアム富山でもやっておりますが、そういった皆様方のお力や連携を利用させていただくことは大事だと思っております。

【藤堂委員】 幾らでもご利用下さい。

【石原校長】 はい。ありがとうございます。

【遠藤議長】 大学は特にそうかもしれませんが、以前よりは学校側と企業との壁というのが徐々に低くなってきていると思っております。やはり連携をしっかりとっていかないと、日本の国力、経済力は上向きにならないと思います。この辺はやはり連携して、協働してやっていかねばいけないと思います。お力添えをいただきたいと思います。

続きまして「管理運営に関する事項」、業務運営等のことにつきまして、移らせていただきます。この点に関しては、犬島委員からお願いできますでしょうか。

【犬島委員】 思いつくことだけ簡単に申し上げます。

1つは、管理運営のところ、「戦略」という言葉が何回も出てきます。「戦略」、ストラテジーという言葉が何回も出てきますが、非常に分かりにくいと思います。恐らく社会的な存在意義を局在化することが目的でしょうが、どうも私らにはよく分からない。「戦略」という言葉より何か具体的にされたほうが良いと思います。例えば「社会や企業のニーズに即応する」とか「合わせていく」とか、あるいは「科学技術の進歩に対応していく」「少子高齢化」「文科省の言い分にも従わなければいけない」などいろいろあると思いますけれども、ある程度具体性を持たれたほうが良いのではないかと思います。

2つ目は、経費予算の1%毎年減額というのは私も腹立たしいと思います。技術立国を標榜しながら、このあり方はどうかと言わざるをえません。要するに、福祉予算や子ども手当、この政策とどういう位置づけをするのかいうことははっきりと主張されたほうがい

いでしょう。どこを推せば主張を聞いてもらえるのかをよくお考えいただいて戦われたほうがいい。先生方は物分かりがよすぎます。もっと主張した方がいいのではと思います。

3番目に、87ページの最後の欄です。これは大賛成です。例えば企業からの要望に応じて製品開発を行う。ただ、最後に報酬を得るという考え方はあんまり好きではありませんね。企業人教育を行うとか、企業人向けの研究会を企画実施していくのは大賛成です。

ところで、Windows XPは買いかえられたのでしょうか。

【石原校長】 はい。

【犬島委員】 あれくらいは自校で解決したというぐらいの力量があってもいいのではないかという気がいたしました（笑）。

以上です。

【遠藤議長】 いかがでしょうか。Windows XPのことはもう終わりましたのでいいかなと思いますけど（笑）。

【石原校長】 「戦略的」という言葉がよくあらわれているということで、もう少し具体的に、社会の構造変化に、あるいは企業の構造変化に対応するような形に変えていくと、その具体案が私どもが言っている「戦略」で、具体的にその中身を書いておけばよかったと反省をしております。

2つ目の1%減額は、私も腹立たしい限りです。10年間で10%減りますので昔60校あったものが10校減るような感覚です。学校の数を減らさないと、昔のような維持ができない。

ただ、高専機構としては文科省との対応をしているわけで、その辺が大学と全く違います。おっしゃるように、もう少し戦略としてもっと力のある方に相談するのも一つという気はします。今のところ、大きい力に巻き込まれている状況です。

【犬島委員】 いつまでこれ続けるのか、分からないのでしょうか。

【石原校長】 そうです。

【犬島委員】 だんだん締まりが増えていきますね。

【石原校長】 20%も下げていったら高専を40校ぐらいにしないといけない。基本的には、今そういう考え方をしています。少子化ですし、学生の数も20%減るのだから減らしたっていいではないかという論理です。外国ですと10年かけて50%も予算を増やしているわけです。アメリカでもそうですし、ヨーロッパでもです。日本はほとんど増やしていない。5%も増やしていない。こういう状況をいつまで続けるのかというと、まさに政治家の基本的な考え方でしょうか。ちょっとおとなしい部分があるのかもしれませんが。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

あとは私の意見ですが、皆様から多くの意見が出ましたので特段つけ加えることはありません。皆様の方から、追加でいかがでしょうか。

【石山委員】 富樫委員にお聞きしますが、さきほど、合格発表から多少期間があったほうがいいのか言われましたが、専願がいいのか併願がいいのかというのは何かありますか。

【富樫委員】 どちらがよいと言い切ることはできませんが、専願でしたら本当に高専で勉強したいという子たちが行くわけで、まだ中学校段階では、どちらにしようかという子たちにするとやはり併願という制度は助かっているのではなかろうかと思っています。一概にどちらがよいとは言いきれないのですが、決めるには少し時間が足りないと感じます。

【石山委員】 併願にすると、まだ選択の余地があるから悩んでしまうということでしょうか。

【富樫委員】 そうです。

【石山委員】 悩んだ末、結局高校へ行ってしまふ。

【富樫委員】 でも最初から、受ければもう受験しないという子もいました。それはいわゆる専願ですね。受ける前に随分時間をかけて指導しているということは事実ですね。

【遠藤議長】 よろしいですか。他はいかがでしょう。

【石山委員】 国の教育再生会議がついこの間、職業教育をする高等教育機関の創設を提言していますが、その辺の話に高専の話が全く出てこない。高専のことを分かっていないかもしれないのですが、さきほどの1%減額ではありませんがどんどん減額していくのかということも含めて、高専制度というものを国でどう考えているかというのは非常に重要な話でして、今言った実践的な職業教育をする高等教育機関、高専も高等教育機関なのに、同じような職業教育をする高等教育機関を創設するなら高専をどうするのかということの話が一つも出てきていない。その辺の話も、富山高専の話ではなくて、機構としてどうするのかという、当然そういう話になりますね。ぜひそういうところも。

【遠藤議長】 その辺はいかがですか。

【石原校長】 機構の方ではいろいろそういうことで、今のような中級技術者を養成する機関でいいのかという話で、いずれは修士だ博士だって、場合によっては必要なものは作っていくと。ただ、四大と同じものは作っちゃいけないよということで、もっと実践力のある形の高等技術者ということで考えているわけです。そうすると、これは10年、20年かけてもすぐにできないから、我々の考える範疇ではないという、要するにそういう考え方

です。

【遠藤議長】 我々の年代では恐らく解決できないと思いますが、今、国の予算がどう動いていくかというのが、まさに石山委員がおっしゃった点だと思います。予算だけではなくどういう方向性で政策を進めるのかということが大事だと思います。犬島委員からは、当事者である我々がもう少しメッセージを強く出せば変えることができるのではないかと、それを出さないのでは何も変わらないというご指摘があったと思います。

国立大学は28年度から、今まで渡していた年間予算の30%分を傾斜配分かけるとされています。改革をしない大学は30%の中で傾斜配分をかけていくと言われていています。富山大学でも喫緊の課題です。

2点だけ私が思ったことは、高専は平成27年に50周年を迎えるとのことでございます。私は15歳の中学卒業のとき、第1回の高専の入試がありましたので覚えています。先ほど石山委員がおっしゃった、高専はどうあるべきか、ビジョンはやはり必要なのではないのでしょうか。

今年、国立大学はミッションの再定義という形で、各学問領域及び大学は今までの過去の歴史を振り返り、今後どういう目標で動くのかというミッションの再定義を行い、各大学、各学系別に文科省がまとめて出されています。

そういう意味では、高専が生まれた背景、そして時代変遷を経て、今何が求められているのかという目標を明確にしてビジョンを描く、そしてどのような人材育成の役割を担うのかを改めて考える時ではないでしょうか。大学とは違う役割があるはずで、高校とももちろん違う役割があるはずで、その中間の、日本を育てるためにどのような人材を作るのかというのが高専の役割だと思います。そのミッションを再定義する。これは法人でやることかもしれませんが、特に商船などの関係であれば独特のものがあるわけで、50周年を機して、やはりやるべき作業ではないかと感じてお聞きしました。

それから、国内のインターンシップについて。

大学は27年度から就職試験の時期が4年生の8月、後ろ倒しになります。大手企業が8月に就職試験をやって、その後の極めて短い期間に中小企業の試験の時期がずれる。本当に短い間に就職試験をやらなくてははいけない。

今、インターンシップは夏休みの時期に集中しています。高専もでしょうか。企業側から言われるのは、大手は別としても、就職試験とインターンシップの両方やっていられしゃる担当が多いので、一気に来られたらインターンシップをやっていられないと。このイ

インターンシップのあり方は大事だと思います。インターンシップを今後どうしていくかは、むしろ企業側でかなり押さえておいていただいたほうがいいかと思っております。

片や文科省はインターンシップの重要性と言いながら、現場の混乱をほとんど考えずに言っているだけではないかとも思いました。とにかく政治は、自分のところに益がないと動かないような感じがしておりますが。頑張りましょう（笑）。

それでは、石原校長から最後に一言お願いします。

4. 閉会挨拶

【石原校長】 2時間の長時間にわたりまして貴重なご意見をいただきまして、どうもありがとうございます。

実は私どもの学校もいろんな分野の寄せ集めの学校でございまして、しかも2キャンパスも置かれている。非常に運営的にはやりづらい部分があるんですが、我々としては、やれる範囲でしっかりやっているということで、今日、委員の方々からいただいた助言を取り込んで改善していきたいと思っております。

今日はどうもありがとうございました。

【遠藤議長】 ありがとうございました。

それでは、高専のますますの発展と皆様のご発展を祈りまして、終わらせていただきます。

ありがとうございました。

〔閉会 午後 4時02分〕